

樺太の花

高橋 愛美

\* 登場人物

菊池知子（70） スエの娘。末期癌を宣告さ

れている。

菊池スエ（92） スエの母親。

菊池武史（84） 享年84歳。スエの夫。

泉 東子（39） スエの娘

村山（59） スエの住んでる村の住人。

立花（31） フリーの記者

医師

看護師

患者

\* あらすじ

癌の末期の告知を受けた知子（70）。13年間、音信不通だった母、スエ（92）を訪ねて、ひとり病院を抜け出しタクシーに飛び乗った。13年前、父親が他界した時に、知子の他兄弟達で母親にすべての財産分与を要求した。母は反対したが、家やすべての財産を子供たちに分け与えて自分は消息をたつた。知子は死ぬ前に母に一目会いたい一心で、母親の居所を突き止め会いに行くが、案の定、冷たくされてしまう。記者の立花が樺太時代の母を取材したいと訪れていた。そこで昔、知らなかった故郷、樺太の出来事を知る。少しはわだかまりが解けたかとおもったが、口論となりスエに帰れといわれてしまう。知子の体力も限界になってきて、母親の育てていた花畑を見て、知子は幸せだったと思う。スエは娘の死を乗り越えて、生きていこうと改めて決心する。

車の走行音

ワイパーの音

雨が降っている音

知子「運転手さん、あとどれくらいで着くかしら？」

運転手「あと一時間ぐらいですかね」

知子「雨……止まないかしらね」

ラジオから天気予報のニュースが聞こえる

運転手「これから天気良くなるみたいですね」

知子「そう、よかった」

運転手「お客さん、車の中、寒くないですか？」

知子「そうね、なんとなく肌寒い感じもするけれど大丈夫よ」

運転手「そうですか。なんか顔色が悪いように見えたもんだから」

知子「そう？車に少し酔ったのかしら」

運転手「疲れたら寝ててかまいませんからね」

知子「ありがとう」

運転手「こんなこと言ったら失礼だと思いませんか？」

知子「似てる？誰に」

運転手「僕のお袋です」

知子「そう、あなたのお母さんに……」

運転手「似てるっていうか、面影があるっていうか、いやあ、気を悪くされたら申し訳ないです」

知子「気を悪くなんて、全然気にしないわよ」

運転手「お客さん見て、つい思い出してしまっただけ」

知子「親御さんとは離れて暮らしているのね」

運転手「いえ、一昨年前、癌を患って」

間

知子「お亡くなりになったの？」

運転手「ええ、癌だとわかった時は既に末期の状態、あつという間でした」

知子「そう、あなたまだお若いのに」

運転手「親孝行したい時には親はいないってホントだなんて思いますよ」

知子「そうね……」

運転手「すみません、こんな話してしまつて」

知子「いいのよ、でも、少し疲れたみたい。眠つてもいいかしら？」

運転手「ええ、どうぞ」

車の走行音

タイトルコール 「樺太の花」

草花が風に揺れている音

畑を走ってくる音

村山「(遠くから) おーい、スエさん」

スエ「あらあら、どこかで私を呼ぶ声が聞こえてくるよ」

村山「スエさん、ここにいたんかい。毎日畑仕事でご精が出るよ」

スエ「なんもだよ、ただ一日動いてないと体がなまっちゃう気がしてね」

村山「うちのばあさまより年上なのに、村一番の働き者だ」

スエ「おだてたって何も出ないよ」

村山「いつも野菜だ果物だつてもらつてばっかしで、これ以上もらい物したら大変だ」

スエ「そんな事より、何か用があつたんだかい？」

村山「そんだ、そんだ、スエさんば訪ねて役場に女の人に来てもらいたいんだ」

スエ「あたしを訪ねて？」

村山「いま、役場の若いもんが車でこっちさ向かつてるって」

スエ「向かつてるって、いったい誰だい？」

村山「とにかく、家さ戻るべ」

スエ「そうみたいだね」

村山「なんだ、まだ来てないべさ」

車のクラクションの音

車が止まる音

村山「あ、着いたみたいだ」

スエ「ホントに誰だか」

車のエンジンが止まる音

工藤「ここが菊池スエさんのお宅です」

車のドアが開く音

知子「ありがとう、そう、ここが……」

風の音

バタバタと走る音

村山「あんたかい？スエさん訪ねてのは？」

知子「ええ」

村山「スエさん、お客さんここにおったよー」

ドアが開く音

知子「母さん……」

スエ「知子……」

知子「母さん、随分探したのよ……」

スエ「どうして、ここがわかったんだい？」

お茶を入れる音

村山「スエさんも、娘さんが来ることいって

くれれば、俺が迎えにいったべき」

知子「タクシーのね、運転手さんが道わから

なくなつてね、役場の方にはホントにご親

切にしていただいて」

スエ「誰も来てほしいなんて頼んじやいないよ」

村山「スエさんも素直じやないねえ。娘さんにしばらく会ってなかったからさ」

スエ「さあ、お茶飲んだらさつさと帰っておくれ」

村山「スエさん……」

知子「いいんです、すみません。私が突然押しかけてしまったんですから」

スエ「私は畑に戻るよ」

村山「スエさん」

バタバタと歩く音

玄関ドアが閉まる音

村山「なんだか、オラ、場違いなところさ来てしまつて、申し訳ないねえ」

知子「ええ……」

草花が揺れる音

畑を歩く足音

知子「かなり広い畑ね、母さん一人で耕して

るの？」

スエの溜息

スエ「まだ帰ってなかったのかい」

知子「ここは気候も穏やかで過ごしやすそう

ね」

スエ「ああ、年寄りにはね」  
知子「役場の人たちもとても親切だし」

スエの溜息

スエ「あんた何しにきたんだい」

知子「何しにつて」

スエ「くだらない話したいならどつか他でや

つておくれ」

知子「くだらないなんて」

立ち上がつて体の埃を落とす音

スエ「知子、あんたたちとは縁を切つたんだよ。あんた自身がそれを一番わかっている

だろ」

知子「母さん……」

スエ「さあ、仕事の邪魔だよ、どいとくれ」

立ち上がつて歩き出す音

知子「今年、十二回忌だよ、父さんの……」

風の音

スエ「今更なんだい、この13年間一度だつて父親の位牌に手を合わせようなんて思つたこともないだろうに」

知子「手を合わせたくても、合わせられなかったのよ」

間

知子「父さんの49日も向かえてないのに、母さん突然、私たちの前から消えてしまった」

スエ「私が何処に行こうと、いちいち知らせる義理なんてないだろう。お前たちとは縁を切ったんだから」

知子「縁を切った切ったって、母さんそればかり、親子の縁はそう簡単には切れないのよ」

バタバタと畑を歩く音

立花「いやあ、スエさんここにいましたか。畑仕事とはホントに働き者ですね」

スエの溜息

スエ「今日はホントに、日が悪いよ」

立花「今日は最中にしてみましたよ。ここのは人気があって、買うのに30分も並んじやいました。どうです？一休みしてお茶にしませんか？」

知子「……あの、すみませんが、どちら様で？」  
立花「わたくしですか、まあ、スエさんのファンと申しますか」

スエ「なにがファンだよ、あんたも懲りない人だよ」

立花「そりゃこれでも記者の端くれですから」  
知子「記者？」

お茶を入れる音

スエ「記者ってのは、ホントに遠慮を知らないね。誰が家上がったっていいっていったんだい（冗談な感じで）」

立花「いやまいったな。いつもこれですから」  
知子「はあ」

立花「あ、そうでした。ご挨拶が遅れてすみません。私、フリーで記事を書いている、立花と申します」

知子「フリーの記者？」

スエ「お前には関係のない話だよ」

知子「関係ないって、心配してるんでしょ」  
スエ「今更、心配してもらおう義理はないよ」

立花「いやあ、まいったなあ、やっとスエさんのお宅にお邪魔できたのに、なんだか大変なところに来てしまったようで……」

間

立花「今日は退散させていただきます。また改めて伺いますよ」

スエ「来たって何も話はしないよ」

立花「ええ、また（笑って）、伺います」

スエの溜息

立花「あ、そうそう、僕の記事が雑誌に載ってるので、よかったら後で読んでみてください」

ドアが閉まる音

知子「なんだか感じはよさそうな人だけど、あれでホントに記者なのかしらね。母さん気を付けたほうがいいわよ。今はあの手この手を使って年寄りを騙す人がいるんだから」

スエ「立花さんはそんな人じゃないよ」

間

知子「そういえば、なんか置いて帰ったわよね。この雑誌に記事が載ってるとか言ってたかしら」

スエ「私に置いていったんだ。勝手に見るんじゃないよ」

パラパラと雑誌をめくる音

知子「なかなかまじめな記事が多い雑誌ね。」

立花「言ってたかしらね……」

間（雑誌をめくる音）

知子「あつた……樺太日記？戦前の樺太にいた日本人の暮らし？」

バサツと雑誌を奪う音

スエ「いいから、お前には関係ないよ」

知子「もう、母さん、乱暴ね」

スエ「さあ、もういいだろ、さつさと帰って  
おくれ」

知子「もう、さつきからそればかり。やつ  
と訪ねてきたのよ。少しはゆつくりさせて  
くれてもいいじゃない」

スエ「だから誰も来てくれなんて頼んでない」

知子の溜息

知子「それにしても、この家大丈夫なの？外  
から見たら今にも崩れるんじゃないかって  
くらいのボロ屋ね」

スエ「バカ言うんじゃないよ。この家はね、  
村の人みんなで修繕してくれたんだ。あの  
梁をみてごらんよ。ちつとやそつとで倒れ  
る家じゃないよ。私と同じだよ。外がボロ  
く見えても中身はまだ捨てたもんじゃない  
んだ」

間

スエ「それにしても、どうしてここがわかっ  
たんだい？」

知子「母さんが、今でも年賀状のやり取りし  
てる小林さんに無理やり聞き出したの」

スエ「なんてことだい」  
知子「小林さんを責めたりしないでね」

間

スエ「今更、なんの用だい？」

知子「……会いたくなかった、それだけよ」

スエ「会いたくなかった？よく言うよ」

間

スエ「あんた、また、お金が必要になったの  
かい？」

知子「そんな、ひどい。違うわよ」

スエ「なにがひどいもんかい……」

知子「本当よ、会いたくなかったのよ」

スエの溜息

知子「……わかったわよ、帰るわよ……帰れ  
ばいいんでしょ……」

間

スエ「こんな狭い家だからね。寝るところも  
ないし、ろくな布団もない。ここに雑魚寝  
でいいなら、今日は泊まっていきなさい。  
でも明日、朝一番の汽車で帰っておくれ」

知子「……ありがとう、母さん」

間

お茶を入れる音

スエ「家族は元気なのかい」

知子「ええ……みんな元気よ」

スエ「そうかい……あんたなんだか顔色が悪  
い気がするけど」

知子「少し疲れたのよ。それに私もいい歳だ  
し」

スエ「今年でいくつになったんだい？」

知子「70よ」

スエ「お互い、ずいぶんな歳になったわね」

知子「そうね」

間

知子「そついえば私、聞いたことがなかった」  
スエ「なんのことだい？」

知子「権太のこと」

雑誌をめくる音

スエ「お前の故郷は権太だからね」

知子「そういえば、最近、自分の生まれ故郷  
に無性に帰りたいって思う日が多くて」

スエ「誰もがそうだよ、若いうちは故郷なん  
て思うことも少ないだろうけど、それだけ

お前も年を取ったつていうことだよ」

知子「母さんも父さんもあまり権太の話して

くれなかった」

スエ「そうだったかね、まあ、つらい思い出があるからね」

知子「私は幼かったから、あまり記憶は残ってないけど」

スエ「けど、なんだい？」

知子「楽しかった、そんな記憶があるの」

スエ「お前が生まれた頃はまだ平和だったから」

間

知子「……つらい思い出って、やっぱり戦後の混乱の事？歴史で少しは学んだけれど、私は断片的にしか覚えてないわ」

スエ「あんたは3つだったからね。でもあの記憶は残ってないほうが幸せかもしれないよ」

間

スエ「日本が終戦を向かえていたのに、樺太は、まだ終戦を向かえてなかった」

知子「覚えていることもあるのよ。引き揚げ船にのって、何度も船を乗り換えたり、真暗いところで恐くて、母さんの手を決して離さなかったこととか」

スエ「今でも、家族全員で引き揚げてこれたことが本当に奇跡としかいえないよ」  
知子「そうよね、たくさん家族が犠牲にな

っているんだものね」

間

スエ「父さんはね、先に船に乗りなさいって言ったのよ。女、子供が優先して船に乗ったからね。でもね、どうしても父さんと離れたくなかったの。もしも死ぬなら、父さんと一緒にいいってね」

知子「そう……」

スエ「覚えてるかい？父さんが豊原の病院で

暖房長の仕事をしたの」

知子「さあ、それは……」

スエ「父さん頑固でね、病院の患者さんが一人でも残っているうちは、自分もここから離れられないって」

知子「父さんらしい……」

スエ「お前は生まれた時から体が弱くて、実はあの頃、重い感染症を患っていてね、船に乗れる状態ではなかったのよ」

知子「そう……」

スエ「医者からはもうダメかもしれないって、父さんも母さんも覚悟してたんだよ」

間

スエ「でも、奇跡が起きた」

間

スエ「父さんと親しかった先生が残っていた  
抗生剤をわざわざもってきて、お前に打つてくれたんだ」

すすり泣く知子の声

知子「そんなことが……」

間

スエ「いやだよ、なんでこんな話してるんだか……」

知子「もっと聞きたいわ、母さんの話」

スエ「……もう、おしまい」

知子「聞かせてよ、つらい思い出ばかりじゃないでしょ」

スエ「……おしまっただって言っただろ……」

知子「故郷のこと、もっと知りたいのよ」

間

スエ「思い出したくなんかなかったんだよ。樺太のこと、昔楽しかった頃の生活も……」  
知子「どうして？どうして楽しいことも思い出したくないの？」

間

スエ「聞いてしまってたんだよ」  
知子「……母さん？」

スエ「父さんが亡くなってまだ間もない頃に  
体調を崩して私が入院してた時、お前たち  
が見舞いに来てくれた」

知子「……まさか母さん……」

スエ「あの時、お前たちの本心を聞いてしま  
った……」

間

スエ「このまま母さんが死んでくれたらって  
……」

知子「違うわ、あれは兄さんが……」

スエ「兄さんがなんだい」

スエ「あの頃、お前が一番お金が必要だった  
だろ」

知子「……そうよ。あの頃は、夫の事業が上  
手いかななくて、あちこちから借金して、  
借りても借りても現状は悪くなる一方で……」

スエ「父さんが亡くなる前から、お前の旦那  
がうちに来てはお金を貸してくれて」

知子「そんな……知らなかった……」

スエ「父さんが、知子には言うなって、男が  
頭を下げて妻の家に金を借りにきてるなん  
てことが妻に知れたらってね」

知子のすすり泣く声

スエ「父さんは人がいいから……」

知子「あの人はね……」

スエ「知ってるよ。離婚したことは」

知子「知ってたの？」

間

スエ「お前が苦勞していたことはわかってい  
たよ。だから素直に私たちを頼ってくれ  
ばよかったのに……」

知子「半端なお金じゃなかったのよ……」

間

知子「だから、だから、母さん、あの家を売  
ったの？全ての財産をお金にかえて、私に  
少しでも多く相続させるために……まさか  
……私が、母さんの全てを奪ってしまった  
の……」

間

知子「どうして、どうしてそんなこと……」  
スエ「……やっぱり帰っておくれ……。帰っ  
ておくれ……」

歩く音

知子「やっぱり、親孝行……出来そうにない  
わね」

歩く音

村山「あれ？あんた、たしか知子さん？」

風の音

村山「スエさんがここにきて12年になるか  
ねえ」

知子「母が本当にお世話になって」

村山「オラも詳しくは知らないんだもさ」

知子「ええ」

村山「ここは亡くなった旦那さんの生まれ故  
郷らしいんだ」

知子「ここが？」

村山「なんだ、やっぱし知らなかったかい」

知子「自分の親なのに、ほとんど知らないこ  
とばかりで」

村山「そんなもんだべさ。あんたも自分の子  
に自分の昔のことなんてあんまりしゃべら  
ないべさ」

知子「そうですね……」

村山「淋しいんだろうな」

知子「え？」

村山「オラは時々胸が痛くなることがあるん  
だ。スエさんの笑顔の後ろには淋しさと悲  
しみが映って見えてさ」

知子「そうさせたのは……私……」

間

村山「庭の花見たかい？」



知子「庭の花？」

村山「スエさんがここで一番、丹精込めて育ててる花だよ」

都会の街を走る救急車の音

病院の待合室の音

東子「母がいなくてどうということですか？」

医師「昨日の消灯時にはいらつしやるのを確認しておりましたが、今朝になって……」

東子「母は、病気なんです。癌なんですよ」

医師「はあ……」

東子「あの体で何処に行つたつて言うんです」

患者「知ってるよ」

東子「え？」

患者「あたし知ってるよ」

東子「母が、何処に行つたかご存知なんですか？」

患者「あんた達、言つてただろ。知子さんに」

医師「何を？」

患者「会いたい人がいたら今のうちに合わせ

てあげなさいって」

東子「母さん、聞こえてたの……」

患者「だから会いに行つたんだよ。一番、

会いたい人にさ」

風の音

知子「今さら、自分が死にそうになつてから、

母さんに会いに来るなんてね」

バタバタ走る音

スエ「待つて、待つておくれよ……」

知子「母さん！」

息をきらせている音

スエ「帰る前に、見ていつておくれ」

知子「母さん……」

間

知子「母さんの行方、探そうと思えばいくら

でも探せたのよ」

スエ「もういいんだよ、その話は」

風の音

歩く音

スエ「こつちだよ」

知子「母さん……これは……」

花が風に揺れる音

知子「この花、覚えてる、樺太の家の庭に咲

いていた……ルピナス」

スエ「樺太に苗をいっばいもつていつたけど、

これが一番元気に咲いてくれたんだ」

知子「やっぱ来てよかつた……」

せき込む知子

スエ「知子？」

知子「大丈夫よ……」

ドサツと人が倒れる音

スエ「知子？しつかりしておくれよ」

知子「花……ルピナス、綺麗だった……」

スエ「知子！知子！」

知子「会いたかつた、もっと早くにね……」

スエ「知子！しつかりおしよ！あんたやつぱ

り何処か具合悪いんだろ。どこまで親不孝

な娘なんだい！こんな老いぼれより早く死

んだりしたら許さないよ。あんたがどんな

に年を取ろうが、お前は私の娘なんだよ。

頼むから、私より長生きしておくれよ。幸

せになつておくれよ」

風の音

畑を歩く音

立花「ここにいましたか」

スエ「あんたかい」

立花「ずいぶん育ちましたね」

スエ「きゆうりはもう少しで収穫できるよ。

今はほら、あつちのビニールハウスのトマ

ト、好きだけ持つていきなさい」

立花「僕、トマト大好きなんですよね」



風の音

立花「それより、少しお茶にしませんか？」

お茶を入れる音

立花「風が気持ちいいですね」

スエ「ホントだよ」

風の音

スエ「あんたはやさしいね」

立花「聞きました。娘さんのこと」

スエ「……親不孝な娘だよ」

立花「最後の力を振り絞って、スエさんに会いに来たんですね」

スエ「誰に聞いたんだい？」

立花「これでも記者ですから」

間

スエ「私の子供たちを遠ざけていたんだね」

立花「自分を責めないでください」

間

スエ「……人の幸せってなんだろうね」

立花「人の幸せですか……」

スエ「あの子は、知子は幸せだったんだろうかね……」

立花「知子さんが幸せだったかどうかは、僕

にはわかりませんけど」

スエ「けどなんだい」

立花「今、スエさんが幸せなら、きっとそれでいいと思いますよ」

スエ「……そうかい」

風の音

スエ「この年になっても人間はよくばりだね」

立花「よくばりですか？スエさんが？」

スエ「孫が遊びに来るっていうんだよ」

立花「へえ」

スエ「もう少し、長生きしたいって欲がね」

立花「それが普通ですよ」

スエの笑い声

スエ「さあて、仕事の続きやるかね」

立花「僕も手伝いますか？」

スエ「邪魔なだけだよ、さっさとお帰り」

立花「はい、では帰ります」

風の音

草花が揺れる音

スエ「まあ、もう少しでそっちに行くんだ。幸せだったかどうかはその時に聞くよ」

スエ「……」

終わり